

# 日本人のメンタリティー

○中野 敬三 (有限会社中野情報技術研究所)

キーワード：社会学, 心理学, 交流分析, 育児教育

## 1. はじめに

東日本大震災の際の日本人の沈着な行動は、世界の注目を集めました。日本人の行動や、その基礎となるメンタリティーが外国人とは少し違っているようです。例えば、中国人の場合、お金儲けに対する関心が非常に高く、それが華僑の経済活動のエネルギーの源泉になっているのかもしれませんが。また、欧米人の行動は、長いキリスト教社会が続き、洗礼を受けて神の子として生きる生活は、日本人の感覚では正確に理解できないものだと思います。逆に、太平洋戦争の時の日本人の行動は理解しがたいほど欧米人と異なっていると感じたようで、アメリカでは大規模な日本人研究が行われ、それが「菊と刀」として結実しました。

現在は、交通手段と通信手段の発達により、海外との情報交換が容易になり、一見すると、日本人は外国人を理解していると錯覚します。しかし、宗教的な影響の強いイスラムの人々のまじめな生活態度を目にするとき、日本人の安易な生活態度に危惧の念を抱かざるをえないときがあります。

日本人は、よく武士道という言葉を口にしますが、武士は、15歳ぐらいで元服式を行い、成人として命をかけて真剣の勝負の人生を送ります。まじめに努力する人間の姿を「マジ？」と言って冷やかす態度は、武士道とは無縁のものと言えます。

政治の世界に眼を転じると、政治家は党利党略の愚策を考えてばかりで、日本の将来を見据えた政策が見えません。

経済的な効率を目的に、グローバル化の動きがありますが、経済のために人間があるのではなく、人間のために経済があるのです。人の移動の自由化は、国の文化にも大きな影響を与えます。グローバル化につい

ても、日本人のメンタリティーを日本人自身がよく理解して、日本の社会と文化が無国籍化するような政策は拒否をする必要があると考えます。

日本人は個人としての力は、外国人に比較して特に優れているとはいえませんが、人間の集団となったときに、まとまって一つのことを成し遂げることが得意のようです。組織に対する犠牲的な奉仕の精神は特筆に値することと思われまふ。郷に入っては郷に従えのたとえが有りますが、日本に来る外国人は、日本人の生き方を尊重する態度を持つべきです。

長引く経済の低迷は、日本人の活力を奪い、高齢化社会は、若者世代の大きな負担となり、社会に閉塞感が漂っています。

日本の社会復活のために、日本人が日本人を良く理解して、日本人のよさを最大限に発揮できる社会を作り出す必要があります。

このような視点から、日本人のメンタリティーを探求し、これに基づいた日本社会復活の対策を提示したいと考えています。

## 2. 方法

### 2.1. 研究方法

本研究は、日本人のメンタリティーの特徴を理解することが基本となります。そのために、日本人以外の研究者からみた日本人の特徴を手がかりに研究することにします。外国人による日本人研究としては、ルース・ベネディクトの著作になる「菊と刀」が、日本人の特徴をよく抽出しているのので、これを手がかりに研究を進めることにします。

「菊と刀」を研究の出発点に据えることは、日本人のメンタリティーの研究が、欧米人、特にアメリカ人

の視点から見たものになりますが、一方で、日本人が気がつかない点も捉えられているので、非常に意義があると考えます。

## 2.2. 分析方法

### 2.2.1 分析方法について

「菊と刀」が取り上げた日本人のメンタリティーの特徴について、それを生み出す原因を探るためには、分析する方法が必要となります。

メンタリティーの特徴を生み出すものは、人間の心の状態であり、それは自我状態であるといえます。

すなわち、メンタリティーの分析を行うには、自我状態の分析が必要になります。

本研究では、人間の自我状態の分析で広く採用されている交流分析の方法を採用することにします。

交流分析では、自我状態は、構造分析と、その延長にある機能分析が具体的な方法となります。また、自我状態と行動とを結び付けるものとして、人生脚本の考えがあり、これを行うのが脚本分析です。脚本分析は、人間の成長を考えた場合、非常に重要な分析方法であるといえます。

以上に述べて分析方法を使って、日本人のメンタリティーの研究を進めていくことにします。

### 2.2.2 交流分析の自我状態

人間は子供→大人→親の形で成長し、存在するので、人間の自我状態として、子供の自我状態、大人の自我状態、親の自我状態が存在します。

交流分析における自我構造の分析では、子供の自我状態を Child (C)、大人の自我状態を Adult (A)、親の自我状態を Parent (P) とし、更に、C と P の自我状態を機能分析して、人間の自我状態には下記の5つの状態があるとしています。(杉田峰康・中村和子、1984)

- Nurturing Parent (NP) : 保護的な親
- Critical Parent (CP) : 批判的な親
- Adult (A) : 大人の自我状態
- Free Child (FC) : 自由な子供
- Adapted Child (AC) : 順応する子供

人間の存在形式と交流分析の構造分析及び自我状態の関係を図1に示します。

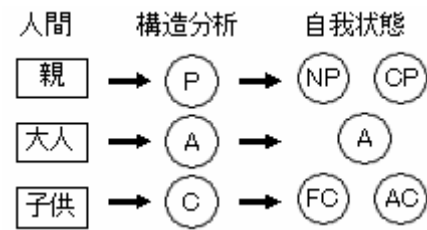


図1. 子供、大人、親の心の分析関係

### 2.2.3 交流分析の人生脚本分析

交流分析では人間の行動パターン・生き方の癖を人生脚本と捉え、人生脚本分析として研究しています。

(杉田峰康・国谷誠朗、1988)

人間の行動は、メンタリティーに支配されるので、メンタリティーの研究には行動パターンの分析が重要であり、特に、三つ子の魂百までで代表される、幼児期の人生脚本は、人間のその後の生き方に非常に大きな影響を持ちます。

日本と欧米における育児方法の違いは、子供の心に決定的な違いを生み出し、さらに宗教的な伝統の違いから来る社会規範は、人間の行動パターンに大きな違いを生み出すと考えられます。人生脚本の違いの分析も非常に重要となります。

## 2.3. メンタリティーの特徴データ

### 2.3.1. 行動パターンに関するデータ

アメリカ人と日本人の生き方の違いを分析したルース・ベネディクトの「菊と刀」(長谷川松治訳)の第12章に生き方の違いが述べられています。

「菊と刀」では、アメリカ人と日本人の生き方の違いを自由と拘束を指標としてU字型の生活曲線で表わしています。育児の特徴として、日本人の子供は自由と我儘が許されて育ち、アメリカ人の子供は厳しいしつけのもとで育てられると違いを述べています。

(ルース・ベネディクト、1967)

生活曲線をU字型曲線で表し、育児法を人形で表し、

図式にまとめたものが図2です。

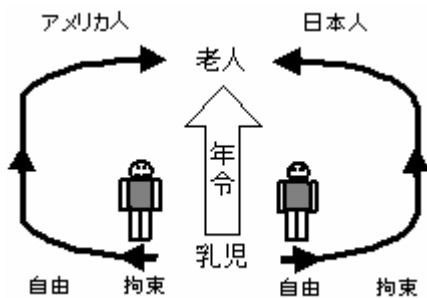


図2. 生活曲線と育児法

### 2.3.2. 特徴を生み出す社会の違い

欧米人と日本人の生き方に違いが生ずる原因は、生きる社会が異なるためであり、それを明確にします。

#### (1) 欧米人の社会と日本人の社会

欧米人が生活する社会は、長期にわたりキリスト教が支配的な権威を持ち、神の戒律が社会規範の基となってきました。絶対的な存在である神を信じ、人間が洗礼により神の子となる契約社会です。キリスト教の影響は生活の広範囲にわたります。

一方、日本の社会は、困ったときの神頼みに代表される、神仏習合も許す緩やかな宗教世界です。

日本人が生活する社会は、共同して暮らす村社会であり、村の掟が社会規範となります。

#### (2) 欧米人の価値観と日本人の価値観

欧米人の社会を特徴づける狩猟生活では、縄張りの大きさが重要であり、強い個人が大きな縄張りを持つことができます。陸続きの欧米では、縄張りを獲得し守るためには、強い個人が求められ、欧米人の価値は、個人の力の最大化となります。

日本の社会を特徴づける農耕生活では、より多くの収穫をあげることが重要であり、新田開発と水の確保に大きな価値があります。新田開発には勤勉な努力が求められ、水は分け合って使うことがルールとなります。勤勉さと分け合いの気持ちは、生活の中で日本人の特徴となってきました。

#### (3) 日本の民主主義化

ルース・ベネディクトの分析以後の日本社会の大きな変化は、日本の社会の民主主義化です。民主主義の定着により、個人の自我意識が高まりました。

### 3. 結果

#### 3.1. 日本人のメンタリティー

##### 3.1.1. 人間の自我状態の定義

人間が生きていくことは、精神活動・意識活動を行っていることを意味します。人間の意識活動の中でも自分の存在感の基本となる自我状態は、重要な精神活動であり、それは人間の生きる場で発現されます。

人間の生きる場はパーソナルな場としての個人・家族の場と、ソーシャルな場としての社会があります。人間は、それぞれの場で子供、大人、親の自我状態を持ち、それに基づいた行動をすることになります。分析の対象とする自我状態を以下に定義します。

パーソナルな場での自我状態は次の3つです。

|                       |      |
|-----------------------|------|
| Personal Parent (P P) | : 親  |
| Personal Adult (P A)  | : 大人 |
| Personal Child (P C)  | : 子供 |

ソーシャルな場での自我状態は次の3つです。

|                     |      |
|---------------------|------|
| Social Parent (S P) | : 親  |
| Social Adult (S A)  | : 大人 |
| Social Child (S C)  | : 子供 |

##### 3.1.2. 欧米人と日本人の自我状態

欧米人のパーソナルな場は個人であり、ソーシャルな場は契約社会であるといえます。

日本人のパーソナルな場は、伝統的に家族であり、ソーシャルな場は生活の基盤となる村社会です。

太平洋戦争後、民主主義が導入され、パーソナルな場に個人の立場が付け加わりました。高度経済成長に伴う都市化は、核家族化と企業一家意識を生み出し、企業社会が村社会に置き換わりました。

日本では、ソーシャルな場は、人間の集合である共同社会であるといえます。

欧米人と日本人の自我状態は図3になります。



図3. 欧米人と日本人の自我状態

### 3.1.3. 欧米人の生き方のフレームワーク

欧米人の生き方のフレームワークを人生脚本(人形)の遷移として表すと図4になります。子供時代にSCとしてキリスト教の戒律を社会規範として身につけ、その後、PC→PA→PPとして個人主義的な生き方をします。キリスト教的社会規範に基づいた個人主義といえるもので、我儘な自由行動ではありません。

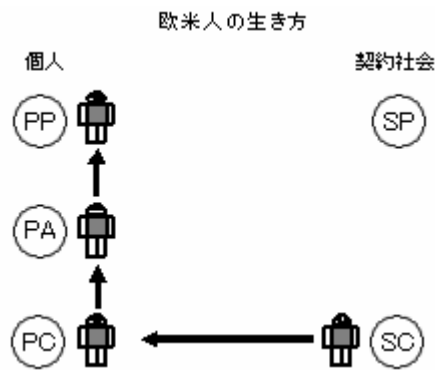


図4. 欧米人の生き方のフレームワーク

### 3.1.4. 日本人の生き方のフレームワーク

日本は戦後に民主主義社会となり、個人の自我状態が意識されるようになった結果、日本人は大人の自我状態としてPAとSAの二つを持つことになりました。

日本人の生き方・人生脚本を人形で表すと、大人の自我状態を指標にした典型的な生き方として、図5に示すように、PAが強い生き方、SAが強い生き方、PAとSAのバランスのとれた生き方の三つになります。

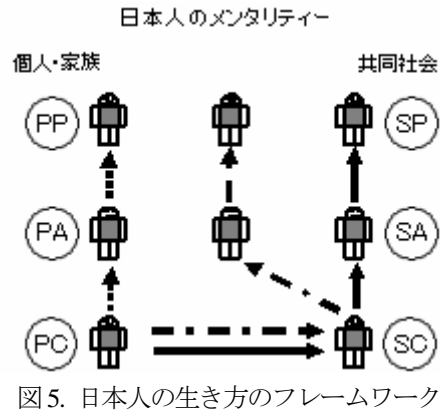


図5. 日本人の生き方のフレームワーク

#### (1) SAが強い生き方

社会に順応する生き方で、個人としての主張を抑える伝統的な生き方といえます。図6に示すように実線で表される建前の生き方と点線で示される本音の生き方が並存し、自我状態としてPAがありません。

社会性のある自我状態は、日本人同士の精神的な親近感を生み出し、社会人としての意識を持つことが求められるが、それが安定した社会を作り上げてきたともいえます。

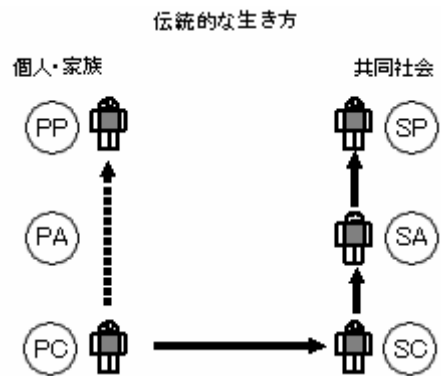


図6. SAが強い生き方

#### (2) PAが強い生き方

個人の自我状態PAを重視する生き方で、家族中心の生き方となります。図7のようにSC、SA、SPの自我状態がないので、社会性を欠き、社会的規範に対する意識が低いといえます。モンスターペアレントに代表される自己中心で社会性が欠如した自我状態は、周りの人間と円滑な関係を作れないことを意味します。

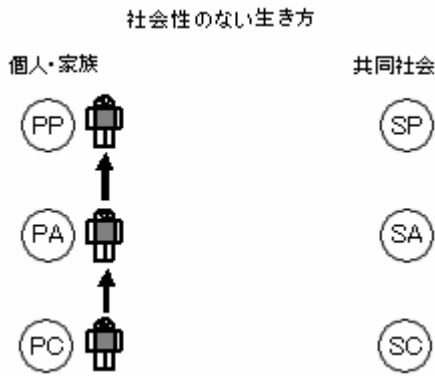


図7. PA が強い生き方

### (3) PA と SA のバランスのとれた生き方

個人・家族の PC から出発し、学校教育などにより SC として社会規範を身につけます。幼児期に肯定的な精神状態を確立できているので、個人としての自我の発達が PA を生み出し、SA とのバランスある生き方が可能となります。個人的な自我と社会的な自我がバランスよく発達することにより、親の自我状態として PP と SP のバランスのとれた生き方も可能となり、人間としての理想的な自我状態といえます。

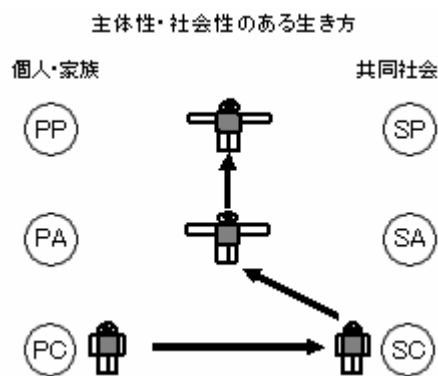


図8. PA と SA のバランスのとれた生き方

## 3.3 人間のメンタリティーの作出プロセス

### 3.3.1. アメリカ人の自我状態の作出プロセス

図1に示した自我状態を、図2に示したアメリカ人の生活曲線に合わせて配置すると、図14に示すアメリカ人の自我状態ができます。

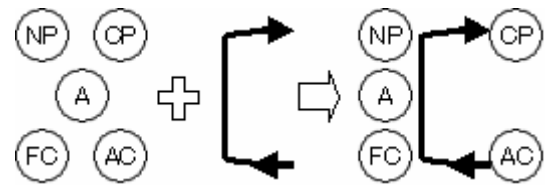


図14. アメリカ人の自我状態の作出プロセス

### 3.3.2. 日本人の自我状態の作出プロセス

図1に示した自我状態を、図2に示した日本人の生活曲線に合わせて配置すると、図15に示す戦前の日本人の自我状態ができます。

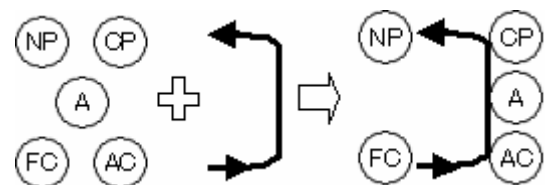


図15. 日本人の自我状態の作出プロセス

### 3.3.3. アメリカ人と日本人の自我状態の違い

アメリカ人と日本人の自我状態をまとめ、比較したものが、図16です。

アメリカ人は、AC から出発し、大人の自我状態 A が自由の側に存在します。日本人は、FC から出発し、大人の自我状態 A が拘束の側に存在します。

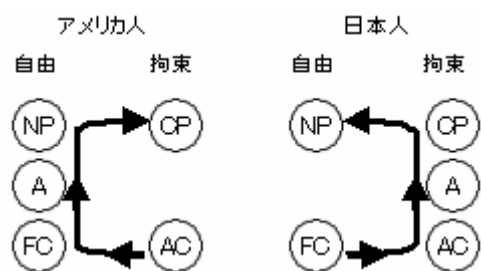


図16. アメリカ人と日本人の自我状態の違い

## 3.4 自我状態の違いの分析

アメリカ人と日本人の自我状態の違いが生まれる原因は、生活曲線の違いであり、それは人間が生活する社会の違いから生まれます。

生活曲線は自由と拘束を基準として描かれますが、自由を求めるのは人間及び家族であり、その自由を規範等で拘束するのが社会であるといえます。

自由を個人・家族に置き換え、拘束を社会に置き換えて、自我状態を分析します。

### 3.4.1. 自我状態とキリスト教社会

キリスト教社会は、神と神の子（人間）からなります。CP(Critical Parent)は父なる神であり、AC(Adapted Child)は神の子としての人間です。

CP(Critical Parent) → GP (父なる神)

AC(Adapted Child) → GC (神の子)

図 14 において、自由を個人に置き換え、拘束をキリスト教社会に置き換えて、自我状態を図式化すると、図 17 になります。



図 17. キリスト教社会の自我状態

### 3.4.2. 欧米社会の経済社会

人間のメンタリティーは、実生活の中に現れるので、生活の基盤となる経済社会環境は重要です。

経済学の分野では、カール・マルクスが「資本論」で想定した人間は FC, A, NP の自我意識を持つ人間であると考えられます。個人のエゴの意識を基本とする自我状態を、経済的人間として捉え、分析の対象にしています。経済的な価値・利益を追求することが、人間の行動を決定するものと考え、資本家の利益の追求が、資本価値の自己増殖に変容したとき、資本主義が経済活動の精神として浸透し、世界に広まることになりました。マルクス主義の考え方では、キリスト教社会は人間の行動の足枷にすぎないものとなりました。

一方、キリスト教社会の意義を認識したマックス・ウェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で人間の社会的な存在意義を考え、経済活動における人間の意志の重要性を説きます。

キリスト教が、長期にわたり社会の共通理念となってきた欧米では、キリスト教的な考えが支配的であり、協会を中心とするヨーロッパの整然とした都市は、キリスト教的な理念の発現とも言えるものである。

### 3.4.3. 自我状態と村社会

戦前までは、国民の中にしめる農民の割合が非常に高く、日本人の生活する基本的社会は村社会であったといえます。

村社会を、交流分析の自我状態の考えで分析すると、CP(Critical Parent)は村を治める村長や長老であり、AC(Adapted Child)は村で育てられる子供です。

CP(Critical Parent) → MP (長老)

AC(Adapted Child) → MC (村の子)

自由を家族で置き換え、拘束を村社会で置き換えると、図 15 の自我状態は図 18 になります。

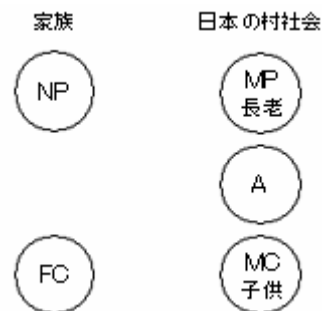


図 18. 日本の村社会の自我状態

村社会にあるAは村を支える成人であり、農作業などを共同で行うことにより、共同体的な生活を送っていました。とくに、封建時代に、名主を中心とする、村単位の納税義務は、村を一体化するものであったといえます。村の掟を破って村八分の扱いをされることは、生活の破綻をいみすることになります。

### 3.4.3. 民主主義と日本人の自我状態

戦後、日本は民主主義社会となり、個人の自我が意識されるようになってきました。プライベートな生活の場として、家族の軸は、家族と個人の軸になりました。欧米人の自由は、社会的な拘束からの自由を意味しますが、日本人はその意味が十分に理解できません。自由を個人の自由勝手な行動と勘違いをして、民

主義の本質を見失っているようです。

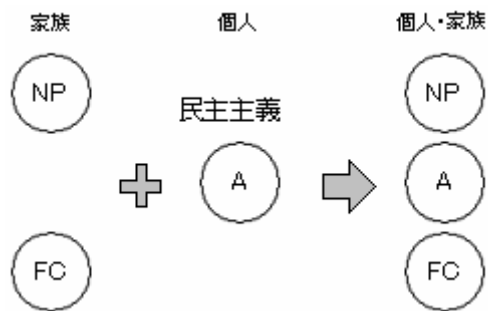


図 19. 民主主義と日本人の自我状態

### 3.4.4. 戦後の日本人の自我状態

戦後の民主主義社会で、大人の自我状態が個人・家族の軸と村社会の軸に存在することになりました。個人の自我状態Aが二つ存在することになったため、自我意識の持ち方に個人差がうまれました。

個人の自立意識が未成熟の日本では、個人の主体性の持ち方が分からないので、村社会の意識が企業一家と言われる村社会を生み、大人の自我状態として会社人間が生まれました。また、村社会からも離れ、企業一家に属さない人々は、生活の場である地域社会の人々と離れると、個人・家族を軸とした生き方になり、社会性を持たない生き方となります。



図 20. 戦後の日本人の自我状態

### 3.4.5. 社会と自我意識

欧米社会と日本の社会には大きな違いがあります。自我意識の問題を考えるには、どちらの社会にも適用できる考え方、方法が必要です。人間に共通の自我意識の分析方法として、自我意識の一般的な考え方を明確にします。

### 3.5. 自我状態の図式の一般化

自我状態をパーソナル(Personal)な自我状態とソーシャル(Social)な自我状態として一般化します。

図 20 の自我状態の図式を、P 個人・家族(Personal)の軸と S 社会(Social)の軸で捉え直します。キリスト教社会を契約社会、村社会を共同社会とすると図 21 の自我状態ができます。



図 21. 欧米人と日本人の自我状態

### 3.6. 欧米人と日本人の幼児脚本

図 21 に示す欧米人と日本人の自我状態に、三つ子の魂である幼児脚本を重ね合わせたものが図 22 です。

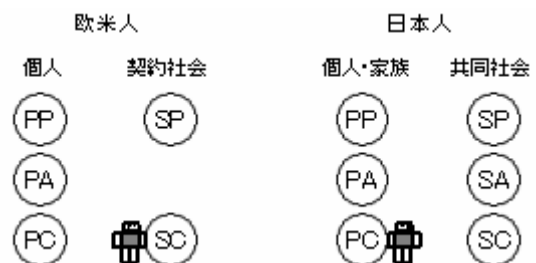


図 22. 欧米人と日本人の幼児脚本

生まれたときから、規範に従った生活を求められる欧米の子供たちは、甘えの気持ちを持つことが許されません。ルールはルールとして従うことが求められるのが欧米社会の生活の基本的態度となります。

一方、日本の子供は、自分の希望通りに授乳を受け、好きな時に寝るので、自己の希望は実現されるものと認識し、それが甘えと我儘を生み出します。日本の子供たちは、学校教育を通じて社会性を身につけていきますが、三つ子の魂の力はすさまじく、甘えが日本人の精神構造の特徴として残ります。お目こぼしが通用する社会となります。

## 4. 考察

### 4.1. 日本人の成長過程

日本の子供は、暖かい家庭環境の中で親の愛情を感じながら育つことが理想となってきました。雛祭りや端午の節句は、子供の健やかな成長を願う日本の良き伝統と言えます。しかし、大切に育てられた子どもは、甘えや我儘な感情を持ちやすく、それが三つ子の魂として日本人の心に深く残ります。

社会性は自然に身につくものではなく、家庭や学校での教育で身につけていくものです。社会に出て自立した人間として生きていくためには、社会人として、社会規範に従って生きていくための訓練が必要です。チームで行うスポーツは、子供の社会性を育てる上で、効果的であるといえます。

成人すると、生活のために職業に就きますが、職場では他人との協調行動が必要です。社会で円滑な人間関係を築いていくためには、対人関係などの生活の知恵が必要です。甘えの気持ちを三つ子の魂として持つ日本人は、自立した大人としての人間関係の持ち方が得意ではありません。依存心は、常に親子関係を連想させ、必要以上に年齢的な上下関係を意識し、人間としての平等性に無頓着になります。これとは反対に、相手の立場や気持ちを考えずに「ため語」を使用して相手の誇りを傷つける人間もおります。相手を尊重する気持ちの欠如は、外国人から見るとソーシャルスキルが下手であると受け取られます。民主主義の定着により、個人の自立意識の高まることにより、大人としての対等な人間関係を築く社会環境が徐々に育っていくものと期待されます。

家庭内での親の教育は、兎角に甘くなり、自己中心の子供を育てる危険性があります。実の親にできない社会勉強は、社会の親が育てる必要があります。近所の頑固親爺が、悪餓鬼を説教する風景がなくなりました。社会的親SPの役割は重要であり、社会が子供を育てるとは、このような意味を含むものです。

将来の社会の担い手となる子どもを、社会の一員である大人たちが共同して育てて行く必要があります。大人の社会貢献、地域社会への貢献は、地域での子育て

てに参加することから始まり、日本人の生きる知恵を伝えていく必要があります。

日本人は、甘えの気持ちを三つ子の魂として人生を開始するので、自立した個人の自覚を育てながら、如何に、社会性を身につけていくかに、人間育成のポイントあるといえます。

#### 4.1.1. PC(Personal Child)の大切さ

日本人の幼児脚本は **Free Child** の自我状態で造られるので、自由と我儘が基本的な生き方となります。

**Free Child** の自我状態は、自由の精神であり、人間信頼の心と自発力を生み出します。

**Free Child** の自我状態を基本的な心構えとして持つ日本人は、本能的に創造性に優れているといえます。

戦前までの、個人的な自由が制限されていた社会では、創造性を発揮する場は限られておりました。

溢れんばかりの創造性は、新しい考え方や生き方を生み出すので、社会の変化を恐れる人々は、創造的な活動を押しさえよとしたからです。

民主主義の意識が定着してきた現在の日本では、創造的な活動を制限するものは少なくなってきました。日本の文化を発展させていくためには、伝統の中に創造の力を吹き込んでいくことが大切になります。

世界の文化をリードできる新しいジャポニズムは、日本人の美意識の創造的な活動から生まれ、世界の文化の発展に寄与できると考えられます。日本人が生来的にもつ自由で闊達な生き方が、日本人による多くの発明や発見を生み出していると考えられます。

#### 4.1.2. SC の自我状態の育て方

日本人の幼児脚本は **FC** の自我状態にあり、自由と我儘が基本的な生き方です。しかし、自由で闊達な人間として、社会の中で生きていくためには、社会性を身につける必要があります。優れた創造性の資質を持っていても、社会の中でそれを発言できなければ、優れた資質を持っていることにはなりません。

甘えを三つ子の魂として持つ日本人は、幼児性・幼稚性の生活習慣を脱皮して、集団の中で生きるすべをできるだけ早く身につける必要があります。



社会性を身につけるには、集団の中に入る必要があるため、まず集団が子供を仲間として受け入れる活動が必要です。そのためには、子供に対して集団がオールフォーワンの精神で対応し、集団活動の喜びを友達と共有させ、集団の一員意識を育てることが大切です。これは、将来子供たちが健全な社会人として育つための基礎と感情であり、集団の規律に従う大切さが理解でき、社会生活の心構えを育てることになります。

#### 4.1.3.SAの自我状態の育て方

SAの自我状態を育てるには、集団の目標を掲げて、メンバー全員が目標達成のためにワンフォーオールで協力をしあう気持ち作りが大切である。

集団の目標の達成に貢献したメンバーを、集団の全員が賞賛することにより、メンバーの集団への貢献意欲が高まります。

種としての生命の継続が生命活動の最大の目標であるとするならば、集団の目標を達成することに大きな喜びを感じる仕組みが人間にはあります。

1つずつ集団の目標を達成していく過程をへて、人間として成長していくことになり、集団を支えるメンバーの貢献意欲が高まることにより、たくましい人間が育ちます。

#### 4.1.3.PAの自我状態の育て方

人間が社会の中で、他の人間の協力の輪の中で生活をしていることを理解したとき、社会の大切さを自覚できます。学校も道路も社会が提供してくれるものであり、社会が無ければ、このようなサービスをうけられません。そして、社会は自分の外にあるのではなく、自分達人間の集団であり、集団の構成員であることを実感するとき、社会の一員意識が生まれます。そして、社会の存続の必要性を理解することにより、社会的親SP(Social Parent)の自覚がうまれます。

自分たち社会の構成員を如何に育てていくかは、家庭内で如何に子育てをするかと同じ問題です。

社会を離れては家族が存在できないので、家族的親PP(Personal Parent)と社会的親SP(Social Parent)は車の両輪のごとく機能する必要があります。

地域での子育てとは、社会的親SP(Social Parent)の役割と言えるものです。地域での子育てとは、地域の行政機関の役割ではなく、地域の人々の役割です。

地域の人々が、地域の子供を、自分の子供のように育てることが大切です。

#### 4.2.日本人集団の特徴

日本人の集団・組織は、お互いが助け合う気持ちをもつ、社会性のある人間集団で、仲間意識が大切です。日本の組織は、新しく入るメンバーを仲間として迎え、必要な教育や訓練を、組織内で行ってきました。

昨今の企業に見られる、使い捨ての金銭契約で結ばれた人間関係は、日本人の心情にそぐわないものです。組織のパフォーマンスを上げるために、メンバーのやる気を高めることが求められますが、やる気は組織への帰属意識がベースです。やる気は組織に貢献できる喜びから生まれもので、鞭やお金で本当のやる気は生まれません。金銭契約をベースとする雇用契約では、メンバーのやる気が出ないのは当然といえます。

経営学で、人間関係論としてホーソンの実験が取り上げられますが、欧米では研究対象となる非公式組織の人間関係は、日本人が日常的に感じている心の働きであるといえます。日本では、資本家が利益のために労働者を牛馬のように使うことはなじみません。

#### 4.3.日本人に適する経営形態

日本の経営現場において、終身雇用・年功賃金体制が崩れてきました。確かに、終身雇用と年功賃金は、経済性の観点からは合理性が小さいといえます。

しかし、企業で働く人間にとって、長時間を過ごす職場は、人間としての生活の場であり、社会的な精神活動の場でもあります。利益を生み出す労働力として並んでいるわけではありません。株式資本の利益創出の機関としてのみ、企業を位置付けることはできません。雇用関係で働く人間は、労働力商品ではなく、血の通った傷つきやすい心も持った人間です。

人類の種としての生命の担い手、リレー役の人間は、大切な生命体であり、商品ではないことを見極める必要があります。

日本人はSC, SA, SPの村社会の自我状態を持つので、生活の場として人間中心の共同社会を求めます。

資本主義的な企業に疑問を呈するものとして、伊丹敬之氏は人本主義の経営、人間を生かす経営を提唱しておりますが、これは、日本人の特徴を生かす経済的思考の例であるといえます。

明治時代の大実業家である渋沢栄一は経営の精神的な拠り所を論語に求めておりました。

金儲け一辺倒に走る社会は、人間の本性とは無縁のものであり、虚飾に彩られた寂しい社会です。お金が人を支配する金権の社会、拝金主義の文化は、空しいものです。

多様な知識や技術を持つ人間が集まって、お互いの力を発揮できる職場を作ることが必要です。

金儲けの職場ではなく、人間が仕事をするための職場が、現在求められているといえます。

## 5. 結語

日本人は、大陸から隔離された地理的条件の中で、安定した社会を保ち続けてきました。

甘えを三つ子の魂とする日本人は、同じ日本人であるという考えがあり、性善説的な考え方をもってきました。お人好しとして、日本人をあざけり、利用する外国人もいるようです。

しかし、人間賛歌とも受け取れる日本の文化は、世界の宝であり、日本人の精神文化は世界の叡智であるので、日本人は、より賢くなる必要があります。

グローバル化という言葉の元に、国際人やコスモポリタンを唱える声も聞こえますが、日本人は日本人らしさを放擲して、無秩序な無国籍人になる必要は全くありません。

母国語を捨てて、英語を公用語化し、多くの労働者を海外に送り出している国もあります。コミュニケーションツールとしての英語を習得するために、母国語を捨て、文化を捨てるような事があってはなりません。男女共同参画についても、性差別を生むとして日本のひな祭りなど伝統的な文化や行事を非難し、その廃絶を求める国もあるようです。

人間としての平等性は、肉体や精神的な違いを全てなくすことではありません。人類の多様性の大切さを考えるとき、人間の性差は、その多様性の出発点ともいえるものです。

人間の多様性を認め、不当な差別の無い社会を作ることが大切です。東洋の真珠、世界の宝として輝き続ける日本を作り、世界にその輝きを届けることが日本の役割といえます。

心の優しい日本人が、豊かな創造性を発揮して、平和で幸福な社会の実現し、世界の手本となることが必要です。日本人は、それを実現できるメンタリティーを具備しているといえます。

2012年5月8日 改訂

## 文献

ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳 1967 菊と刀 292-293 社会思想社

杉田峰康・中村和子 1984 わかりやすい交流分析 3-5 チーム医療

杉田峰康・国谷誠朗 1988 脚本分析 66-77 チーム医療  
中野敬三 2010 「菊と刀」の視点で見る日本人選手のメンタリティー 日本フットボール学会 第8回 抄録集 52